

初期マルクスの一考察

——経済学批判への端緒としての「ジェームズ・ミル評註」を中心として——

重 田 晃 一

ま え が き

本稿は若きマルクスのパリ時代（一八四三年十一月—一八四五年一月）、つまりかれがはじめて経済学の本格的な研究にとりかかった時期にもなされた「経済学研究ノート」⁽¹⁾のうち、とくにジェームズ・ミルの『経済学綱要』からの抜萃に書き添えられた評註をとりだし、若きマルクスにおける「経済学批判への端緒」の確立という視角から、これに若干の照明をあたえようと試みたものである。

一八四四年の二月パリで発刊された『独仏年誌』第一輯に発表された二つの論稿、「ユダヤ人問題によせて」および「ヘーゲル法哲学批判序説」において、かれははじめて独自の社会主義的立場をうちだしている。ところでそのことはまた別の観点からいえば、当時の彼の問題意識の中核をかたちづくっていた人間の自己疎外という事象は、その根源を市民社会の中に、つまり後の言葉でいえば、資本制的な人間の物質的生活の生産と再生産の仕方のなかにひそめていることが、感知されるに至ったことを示すものでもあった。

かくていまやかれは問題解決の鍵が経済学の研究にあることを悟り、主としてエンゲルスの「経済学批判大綱」から刺戟を受けつつ、また他方ではA・コルニユの主張にしたがえば、⁽²⁾ヘスから一定の示唆をえて、当時の主要な経

経済学者の著作、論文に次々と検討を加えていった。この研究の過程で、かれはこれらの経済学者の著作、論文から大量の抜き書をおこない、そのうちのいくつかにはかれ自身の評註を書き添えているが、われわれは今日その大半をマルクス・エンゲルス全集第一巻第三巻によつて知ることができる。それによると、かれはまず研究の導きの糸としてエンゲルスの「経済学批判大綱」の要約をなし、続いてスミス『国富論』、リカード『経済学及び課税の原理』、ジェームズ・ミル『経済学綱要』、セイ『経済学概論』、その他マカロック、スカルベク、デステュット・ド・トラシ、ポアギューイベル等の著作、論文からそれぞれ抜萃をおこない、そのうちスミス、セイ、リカード、ジェームズ・ミル、マカロック、ポアギューイベルについての箇所では、量的なちがいはあるが、かれ自身の評註を書き添えている。またどういう理由からか全集は収録していないが、かれがビュレー、ローダーデル、ロー、リスト、オジャンダー、シュツの著作からも、いくらかの抜萃を作成していたことは明らかであり、そのうちリストの『政治経済学の国民的体系』からの抜萃は、リストの価値論についての簡単な評註を含んでいるようである。⁽³⁾

とここでこの「経済学研究ノート」のうち、ジェームズ・ミルの『経済学綱要』からの抜萃のところで書き添えられた評註は、若きマルクスにおける新しい独自の経済学創造の試みをさぐるうとするばあい、次の理由から、とりわけ注目に値するようと思われる。まずこれらの「ノート」構成の形式的な比較からいうと、ミルの『綱要』そのものからの抜萃は、他のスミス、リカード等からの抜萃に較べて、特にその量が多いとはいわれない。ところがこれをマルクス自身の書き添えた評註について比較してみると、「ミル評註」は量的にいつても全評註の殆ど半ばにあたり、これに次ぐ大量の評註をかかえこんでいる「リカード評註」と較べてみても、「ミル評註」は、「リカード評註」のほぼ二倍の大きさに達している。さらにこれをその内容について検討してみると、他の評註では抜萃

の内容に即して断片的な評註が加えられるにとどまり、そのために、かしくではテーマがかなり分散されているの
 にたいして、「ミル評註」ではテーマが殆ど一点に集中され、その結果、ここでは評註はなお評註としての断片性
 をとどめつつも、殆ど評註の域を脱して、一つの試論に近い姿をおびるに至っている。その内容の概観は、ローゼ
 ンベルクの研究によつて、これをうかがうことができるが、論述の便宜から簡単に触れておくと、われわれはこの
 混沌たる評註から、次の諸特徴をひき出すことができる。

まず第一に言えることは、なるほどミルの『綱要』が評註成立の誘因となつてゐることに疑いはない。だが評
 註の中心主題はあくまでも「国民経済学」⁽⁵⁾全体の基本的性格の批判にあり、したがつて他の評註と異つて、この評
 註は、ミルの『綱要』そのものには殆ど言及していない。第二に、「国民経済学」の批判は、この経済学の諸範疇
 は私的所有と不可避的にむすびついた諸範疇である、という視角から遂行される。いまこの点を「ミル評註」の形
 式的な構成からみると、「国民経済学」の貨幣把握にむすびつけてこの批判を展開したかなり大きなブロックと、
 私的所有にもとづく交換は、人間の他の人間との敵対に導く、という観点からなされた交換の批判に関するやや少
 さなブロックとの二つからなりたつてゐる。そしてこの評註を丹念に読むばあい、われわれは、若きマルクスが経
 済学研究のそもその出発点において、「国民経済学」の基礎範疇——労働、私有財産、分業、交換、価値、貨幣
 等——をいかなる視角から批判し、いかなる方向に止揚しようとしていたかを理解することができる。この点、ほ
 ぼ同じ時期に書かれたと推定される『経済学哲学手稿』では、これらの諸範疇の検討が殆ど欠けているだけに、⁽⁶⁾
 「ミル評註」は、若きマルクスにおける経済学の形成をあとづけようとするものにとつて、見逃すべからざる資料
 である。第三に、後に述べるように、ほぼこの時期のマルクスは、「国民経済学」はイデオロギー的には功利主義

思想と不可分離的に結びついている、と考えていた。とすれば、「国民経済学」の批判は、そのまま功利主義思想の批判につながり、したがって「国民経済学」の全面的な批判(止揚)の原理は、功利主義思想に対立する他の思想的源泉から汲み出されなくてはならない。後に述べるように、ドイツ古典哲学の精髓(疎外の理論がすなわちこれである。いまやこの「ミル評註」において、『独仏年誌』の諸論稿までのドイツ古典哲学の研究と、パリ時代の「国民経済学」の研究とは、漸くここに一点に凝集し、以後ドイツ・イデオロギーを起点とする史的唯物論の確立——マルクス経済学の本格的形成という大河に向つて流出してゆく。かくてわれわれは、「ミル評註」から、後の『資本論』においては経済学諸範疇の展開そのものと化し、その背後にひそむに至つた方法原理のウルティプスを、またそれがいかなる思想的源泉と結びついているかを、いつそう鮮明に析出することができるのであつて、この点で、「ミル評註」は、他の評註や四四年『手稿』と較べて、独自の意義をもつているといわなくてはならない。⁽⁷⁾

以下「ミル評註」のもつこれらの諸特徴に着目しながら、これを若きマルクスにおける「経済学批判への端緒」の確立という基本視角に結びつけて、若干の考察を試みてみたい。

(1) K. Marx, *Aus dem Exzerpthen (Paris, Anfang 1844—1845)*, in *Marx-Engels Gesamtausgabe* Abt. I, Bd. 3, SS. 435~583.

なかむしエームス・ミルの『経済学綱要』からの抜萃と評註は五二〇頁から五五〇頁までにまとめられている。

(2) 本稿第三節註(2)参照。

(3) Vgl. *MEGA* Abt. I, Bd. 3, SS. 413~416.

Vgl. M. Rubel, *Les cahiers de lecture de Karl Marx 1840—1855*, in *International Review of Social History* Vol. II, Part 3, 1957, pp. 397~399.

(4) 註(7)の①の書物がそれである。

- (5) この時期のマルクスは、いまだなお「俗流経済学」と「古典経済学」という区分をとらないで、「重商主義」や「フィシオクラート」の経済学と區別して、ヌミス以降の経済学を「国民経済学」の名のもとに一括している。したがってここではヌミス、リカードはもちろん、セイ、ジェームズ・ミル、マカロックも同一の分類基準の中に入れられているから、本稿もまたカッコで包むことによつてその旨を明らかにしつつ、この言葉を用いることにした。
- (6) たとえば『手稿』は疎外された労働の概念の詳細な分析や、分業に関する言及を含み、また『第三手稿』は、編輯者によつて「貨幣」と題せられた未完の断片を含んでいるように、これらの諸範疇の検討が全然おこなわれていないというわけではない。なお以下の本文では、この『手稿』は四四年『手稿』と略記する。
- (7) 参考までで、「ジェームズ・ミル評註」を中心とするこの「研究ノート」に言及した文献のうち、筆者の目に触れたものをあげておく。

- ① D. I. Rosenberg, *Die Entwicklung der ökonomischen Lehre von Marx und Engels in den vierziger Jahren des 19. Jahrhunderts*, Berlin 1958, SS. 83~129.
- ② M. Rubel, *Karl Marx, Essai de biographie intellectuelle*, Paris 1957, pp. 117~125.
- ③ T. B. Bottomore and M. Rubel (ed.), *Karl Marx, Selected Writings in Sociology and Social Philosophy*, London 1956, pp. 171~172.

右の諸文献のうち、①は一九五四年にソウエツトで出版されたローゼンベルクの遺稿の独訳であつて、我が国でも『初期マルクスの経済学説の形成』という題名で、副島種臣氏によつて訳出されている。②については、リュネールは、第一篇(「自由主義から社会主義へ」)の第五章「政治経済学と社会倫理」において、若きマルクスにおける「国民経済学」批判の倫理的基礎確立の視角から、「経済学」人間の貧困の科学」の標題でセイ、リカードにたいするマルクスの評註を考察し、「経済の社会学、人間の社会」という題名のもとに「ジェームズ・ミル評註」に若干の分析を加えている。

③はマルクスの著作、論文からの抜萃集であつて、第三篇(「資本主義の社会学」)の第四章「資本主義と人間の疎外」で、「ミル評註」から二つの断片がとりだされ、英訳のうえ収録されているのは、この種のものとして珍しい。

なお邦語文献としては、時永淑「マルクスにおける『相対的過剰人口』論の成立について(続)」(『経済志林』二五巻三号)が唯一のものであるが、この論稿は、さきのローゼンベルクの「ミル評註」解釈への一批判を含んでいる。

論を進めるにあたり、おそらくは直ちに誰れの念頭にも浮ぶであろう次の疑問に考察の目をむけることによつて、問題展開の緒としたい。『剰余価値学説史』のマルクスによれば、ジェームズ・ミルの経済理論の基本的な性格は、リカード理論の形式論理的な整合化への努力と、この努力がそのままリカード学派解体の第一歩であつた、⁽¹⁾という点にある。ところが他方ではすでに述べたように、若きマルクスはこのミルの『経済学綱要』からの抜萃の箇所⁽²⁾で、少くともミルの理論を機縁として、「国民経済学」の基本的性格の批判と、これにかわる独自の経済学創造の試みを提示している。とすれば、若きマルクスにおけるかかる野心的な試みが、ミルからの抜萃を機縁として「評註」のかたちで行われたということ、さきの『剰余価値学説史』のミル評価との間には、かなり大きな断層が介在しており、したがつて「ミル評註」そのものの検討に入るに先立つて、予めこの点を解決しておかねばならない。

さしあたり「功利主義派」の闘将として、一八〇〇年代初期のヨーロッパ思想界でミルの博していた名声と地位が、あるいはリカードの『原理』と較べたばあい、ミルの『綱要』の叙述にみられる教科書風に体系だてられた総体性が、経済学の研究を始めたばかりのマルクスには、「国民経済学」の批判に便利だと考えられた、ことなどが、その理由として指摘されるかもしれない。勿論そういつた事情も仿いたであろう。だがしかし、いま一步踏みこんで、これらの「研究ノート」が綴られてよりほぼ一年後に書かれたといわれる『ドイツ・イデオロギー』をとりあげ、そのなかの功利主義思想と経済学との関連をとり扱つた箇所を顧みるばあい、われわれは、そこにいま一層深い理由が伺っていたのではないか、との推定を下すことができる。

『ドイツ・イデオロギー』によれば、功利主義思想の核心は、「人間の相互のさまざまな関係をすべて有用性と
 いう一つの関係に解消する」点にあり、その歴史的社会的な基礎は、「近代市民社会の内部では、すべての関係が
 一つの抽象的な貨幣および商売の関係のもとに実践的に包摂されている」ことにあつた。⁽²⁾ そのさいかれは、エルヴ
 エシウス、ドルバックの思想とベンサム、ミルの思想とを、次の点で区別している。すなわちかれのいうところでは、前者の特色が、そこでは実証的な経済的な内容がとり去られて、なによりも哲学体系としての「一般性」に関
 心が向けられていた点にあつたとすれば、後者の特色は、まさにここでは経済的な内容が再びとりいれられて、さ
 きの有用性は個々の階級の一定の利用関係として、「内容豊かな総体性」をおびるに至つた、点にあつた。⁽³⁾

以上のような功利主義思想の發展史のスケッチによりながら、『ドイツ・イデオロギー』は、ミルの経済理論を
 この功利主義思想と関連せしめて、「功利説と経済学との完全な合一を、われわれはついにミルにおいてみいだ
 す」⁽⁴⁾と述べている。「啓蒙思想の最後の成果」⁽⁵⁾ともいわれる、もつとも典型的なブルジョワ思想としての功利主義
 と、ブルジョワ経済学の頂点としてのリカード経済学の、ミルにおける合一、——後の『剰余価値学説史』その他
 のミル評価といささか異つた観点からなされたこのミル評価に結びつけて、若きマルクスのミルからの拔萃を理解
 するばあい、われわれは、ここに「ミル評註」成立の由来を、かなり正確に推定することができるかと思われる。

さて、『ドイツ・イデオロギー』のマルクスは、「功利説ははじめから公益説の性格をおびていた」と言い、そ
 れに続いて、「しかしながらこの性格は経済的諸関係、とくに分業および交換をとりいれることによつて、はじめ
 て内容豊かなものになつた。分業において個々人の私的活動は公益的になる」⁽⁶⁾と述べている。つまりマルクスに
 よれば、分業、交換こそ、「国民経済学」とそのイデオロギー的側面の一般化たる功利主義思想との接合を、端的に

示す範疇である。「ドイツ・イデオロギー」における分業、交換範疇の以上のような解釈を踏まえて、「ミル評註」の課題が、「国民経済学」の基本的性格の批判にあつたことを想起するとき、われわれは、「評註」において、検討の対象がもつばら交換、価値、貨幣等に集中された理由の一端が、那邊にあつたかをうかがうことができる。

ミルの経済理論と密接に結びついているこの功利説について、『ドイツ・イデオロギー』は、さらに次のように言っている。「経済的な内容は功利説をだんだんに現存物のたんなる弁明に、すなわち現存の条件のもとでは、人間相互の現在の諸関係こそもつとも有利な、もつとも公益的なものである」という弁明にかえてゆく。すでに近年の経済学者のばあいには、それはこのような性格をおびている」。

おそらくここで、この「近年の経済学者」の一人として、マルクスの念頭にミルが浮んでいた、と推定して間違いない。すでに述べたように、「ミル評註」は、「国民経済学」と功利主義思想との結節点という視角から、交換、価値、貨幣等の諸範疇をとりあげるに至つたと考えられるが、評註はまた、さらにそこから進んで、ミルの理論がその代表的一例である、「国民経済学」の現実弁護論的性格を剔出するために、その検討を、これら諸範疇の前提であり、「国民経済学」者達がたんに与えられたものとして受け入れて、これを批判的に考察することを知らなかつた私有財産の検討にまで、あるいは人間の社会的生活の存立の基礎であり、したがつてまた私有財産の基礎でもある労働の究明にまで、押し拡げねばならなかつた。

さて以上のような「ミル評註」と『ドイツ・イデオロギー』の一叙述との比較対照から、要約すれば、われわれは次のような評註の特徴づけを得るであろう。すなわち、ここでは、「国民経済学」の分析・批判は、「国民経済学」の諸範疇のたんなる内在的経済学的な検討に限定されないで、この検討は、「国民経済学」のイデオロギー的

性格の全面的な批判と結びあわせられ、したがってさきの分析・批判は、「国民経済学」がその基礎において固く結びついている功利主義思想にかわる新しい思想的基礎の獲得、さきの功利主義思想と結びついた「国民経済学」の諸範疇の再規定のための方法的原理の確立、およびその適用という姿をとって現われる。以下第二節では、「国民経済学」のそれにかわる思想的基礎の確立を、若きマルクスにおける労働観・人生観・社会観に焦点をあわせて考察し、第三節では、この思想的基礎に立つてものとされた独自の方法的原理の確立と、この原理による「国民経済学」の基礎範疇の批判と編成替えの試みを中心に、「ミル評註」の内容を跡づけてみたい。

註(1)『剰余価値学説史』は次のように言っている。「ミルは、リカードの理論を、かなり抽象的な輪廓においてであるが、とにかく組織的な形態で叙述した最初の人であつた。かれが努力の目標としてゐるものは形式論理的な帰結である。それゆえリカード学派の崩壊もまたかれとともにはじまる」(Theorien über den Mehrwert, herausgegeben von K. Kautsky, Bd. III, S. 94. 邦訳、ヤル・エン全集、一一卷一〇五頁)。

なお以下の論述では煩わしさを避けるために、簡単に「ミル」「ミル評註」「ミル経済理論等」と略記する。

(2) K. Marx/F. Engels, Die deutsche Ideologie, in *Marx-Engels Werke*, Bd. III, S. 394. 邦訳、岩波文庫版、二〇三頁。なお功利主義思想の核心を、「人間相互のさまざまな関係をすべて有用性という一つの関係に解消する」点でとらえる見解は、ヘーゲル『精神現象学』(六、精神、B、自己疎外精神、教養、II、啓蒙)における、「啓蒙の真理」に関する論議に由来しているかに解される。

- (3) Vgl. Ebenda, SS. 394~397. 邦訳、同上、二〇三頁—二〇七頁。
- (4) Ebenda, S. 397. 邦訳、同上、二〇八頁。
- (5) Ebenda, S. 394. 邦訳、同上、二〇三頁。
- (6) Ebenda, S. 398. 邦訳、同上、二一〇頁。
- (7) Ebenda, S. 399. 邦訳、同上、二一〇頁。

二

以下考察の主題を、「ミル評註」における「国民経済学」批判の基礎にある若きマルクスの人間観、労働観、社会観の内容に集中するにあたり、後期のマルクスにおけるこの点についての見解のいくつかをとりだすことによつて、問題の所在を明らかにしておきたい。第一に、一般に「国民経済学」は、分業にもとづく個々の孤立した個人の生産を絶対化し、社会は、その生産物の交換によつて、これらの諸個人が結びつけられるところにはじめて成立する、と考えたが、これにたいしてマルクスは、「社会で生産しつつある諸個人」、あるいは、「諸個人の社会的に規定された生産」⁽¹⁾という規定をこれに対置している。第二に、四四年『手稿』が教えるように、「国民経済学」は私有財産の主体的本質を労働としてとらえることによつて、市民社会における人間の物質的生活の生産ならびに再生産の科学的な理解の基軸となるべきものを、明らかにしたが、他方では、この労働を「自由と安楽と幸福の犠牲」として理解したスミスの労働把握に後の『資本論』が批判を加えたように、「国民経済学」の労働把握は、すでにそのうちに、後の俗流化の契機を含んでいた。かかる「国民経済学」の労働把握にたいして、マルクスは、前者はこれを承継しつつも、後者については、これに「正常な生命活動」⁽⁴⁾という労働の本質規定を対置している。

ところで、「国民経済学」のそれにとつてかわるべきかかる労働観、人間観、社会観の確立は、その生成過程に即していえば、すでに、かれが『独仏年誌』の諸論稿に至るまでの研究過程で格闘してきたドイツ古典哲学の精髓、ヘーゲル、フォイエルバッハの哲学の批判的摂取と結びついて、なしとげられたものであった。

「人間の**本質**はただ**共同体**のなかに、**人間と人間との統一**のなかに含まれている」⁽⁵⁾、という規定にもみられるよう

に、フョイエルバッハによれば、現実の人間は、決して個人として孤立的に存在するものではなくて、人間は、もともと感性と理性との統一として全体的な存在であるとともに、他の人間との統一として共同的な存在でもあった。「社会で生産しつつある諸個人」という規定を志向する歩みのなかで、若きマルクスは、現実的な人間の本質を類的な存在——共同的な存在としてつかむフョイエルバッハの考えを承け継ぐとともに、他方では、これをヘーゲルの労働観と結びつけて理解することによつて、さきの類的存在という人間把握に独自の内容を与えた。ここにヘーゲルの労働観というのは、四四年『手稿』が精力的な検討の対象とした一論点であつて、『手稿』は、ヘーゲル『現象学』を貫く「運動と創造の原理としての否定性の弁証法」といわれるものから、その核心として、——一論者によれば——ヘーゲルが「労働を人間の自己形成の弁証法的な過程としてとらえ、人間をかかふる労働過程の成果として動的発展的に考へている」点、その意味で、「労働が人間の本質であるというヘーゲルの主張」をとりだして、これをきわめて高く評価した。

そのさい注目すべき点は、両者を相互媒介的に止揚しようとする若きマルクスの努力である。すなわち両者から以上の諸点を承け継ぐにあたり、この時期に開始された経済学の研究によつて規定されつつ、かれは一方ではフョイエルバッハにおける「感性的対象的な存在」という人間把握によつて、結局は抽象的な精神労働に解消されてしまつたヘーゲルにおけるさきの労働を、対象の感性的な労働、つまり生産的实践としての労働としてとらえなおすとともに、他方では、かかる労働観を媒介にして、「感性的対象的な存在」というフョイエルバッハの人間把握を、「感性的対象的な活動」という把握にまで深めるべく努力した。⁽⁸⁾

ともあれ、「国民経済学」の研究を媒介にしたヘーゲル、フョイエルバッハの批判的撰取の深化をとおして、パ

り時代のマルクスは、ほぼ次のような労働観・人間観・社会観に到達している。

すでに述べたように、若きマルクスにとつては、もともと人間はその本質において、類的存在Ⅱ社会的な存在であつた。だがパリ時代のマルクスのかかる人間観をして、それに先立つ時期のそれから著しく前進せしめている点はこの類的存在Ⅱ社会的存在としての人間の本質の核心を、生産的实践としての労働に求めた点にあつた。四四年『手稿』は次のように言っている。「生産行為のやりかたのなかに一つの種の全性格が、種の類的性格がよこたわつている」⁽⁹⁾。あるいは言う、「対象的世界の实践的産出、非有機的自然の加工は、人間が一つの意識ある類的存在であることの、すなわち類にたいしては彼自身の本質として、自分にたいしては類的存在としてあいたいするものであることの確証である」⁽¹⁰⁾。

「労働発展史のなかに全社会史解釈の鍵をみつける」、というエンゲルスの言葉からも明らかのように、史的唯物論は、一面では労働の発展史観でもある。とすれば、労働は自然と人間、人間と人間を結びつける人間の根源的な存り方である、というさきの四四年『手稿』の規定が確証するように、史的唯物論の確立に通ずる基軸がはやくもここにうちだされているということができ⁽¹¹⁾る。ところで「ミル評註」は、これらの諸点について直接に論及するところきわめて稀であるが、それにもかかわらず、「評註」の全叙述を貫く方法的原理を支えるものとして、さきの諸点が一貫して流れていることは明らかである。いまそれらについて簡単に考察すれば、次のようになるであろう。

人間がその本質において類的存在Ⅱ社会的存在であることは、「ミル評註」の基本的前提であり、そのことは、叙述中におけるこれに類する語の類出によつても証示⁽¹²⁾される。だがそのなかでも、社会的な存在としての人間を、「全体的な存在」として把えて展開した、次の論述は興味おかい。すなわち「評註」は、「国民経済学」は交換の規

定的動機を必要、欲求に求めている、と肯定的に述べながら、しかもこの必要、欲求を、「全体的存在」という人間の社会的な存在の仕方と結びつけて、これに次のような変容を加えている。

「二人の私的所有者を互に関連させる紐帯は、かれらの私有財産の素材をなす対象の特殊な本性である。この双方の対象にたいする憧憬、つまりそれらにたいする欲求は、私的所有者のおのおのにたいして次のことを指示し、意識せしめる。すなわち、かれは私有財産のほかになす諸対象にたいしてそれと異つた本質的な関係をもっており、かれは自分でそう思つていられるように特殊な存在ではなくて、全体的な存在であつて、かれの欲求は、他人の労働の生産物にたいしても内面的所有の關係をもつていられる。なぜならある物象にたいする欲求は、その物象がわたしの本質に属するということが、かの物象がわたしにとつて存在し、わたしがそれを所有することは、わたしの本質をわがものにするのであり、わたしの本質に固有のものであることの、全く明白で且つ反論の余地のない証拠であるのだから」(S.537~538)。

交換の規定動機たる必要、欲求を、「全体的存在」という社会的な存在としての人間の存り方とかかわらせて理解する右の態度は、後に述べるように、交換は、生産過程における活動とならんで、人間の類的活動の一形態である、という見地に直接に連り、やがて市民社会における交換は、分業と並んで、「人間の社会的交通の疎外された形態」である、という「国民経済学」批判の基礎視角につながつてゆくだけに、右の叙述は注目されるべきである。

類的存在としての人間把握の中核をなす生産実践としての労働については、「ミル評註」は、これを「自由な生命の発現」(S.547)と規定し、あるいはこれを、「生命の享受」(S.547)、「人間の自然的本性の現実化」(S.539)、「内的必要にもとづく活動」(S.547)等と言ひ換えている。労働の本質についてのこのような理解が、労働を「自由と安楽と幸福の犠牲」と考えるスミスの理解と、直接に対立することはいうまでもない。そして市民社会の労働が

スミスの目にかかるものとして映じたのは、——後に述べるように——市民社会では、「自由な生命発現」としての労働が自己疎外された形態をとっていることによるのであつて、若きマルクスは、市民社会の問題性をこの点にみた。しかもかかる労働の本質規定は、市民社会の労働の批判的思想的基礎として、『賃労働と資本』(一八四九年)のほぼ同一の表現を介して、『資本論』(一八六七年)の「正常なる生命活動」という規定において再出し、また『ゴータ綱領批判』(一八七五年)は、共産主義社会における現実の労働の規定として、「たんに生活のための手段ではなく、生活の第一の欲求」となつている労働という表現によつて、これを再びとりあげているのであつてみれば、⁽¹⁴⁾マルクスがその経済学研究の発端においてうちだしたさきの労働の本質規定は、その充分な拡がりにおいて理解されねばならない。

さて以上の労働の本質規定を踏まえたうえで、「ミル評註」は、この労働こそが「愛」とか「友情」とかいたものでなくて——フォイエルバッハのいわゆる我と汝とを結びつける絆である、という見地に立つ。また「評註」は、この見地をさらに具体化して、生産過程でおこなわれる人間の活動の交換、あるいはこの活動の成果である生産物の交換という姿態をとつた「人間の社会的な交通」(social intercourse)こそ、人間のもつとも基礎的な社会的諸関係(我と汝の関係)である、という観点をうちだしている。⁽¹⁵⁾しかもそのさい注目すべきことは、さきに人間の本質が類的存在として規定され、労働はかかる存在としての人間の「自由な生命の発現」としてとらえられたのに対応して、ここでも、さきの人間の諸活動は、類的な活動として直接に社会的なものである、と規定されていることである。すなわち「評註」は言う、「生産そのものの内部における人間的活動の交換も、人間的生産物の相互的な交換も類⁽¹⁶⁾的、活動の交換であり、類的生命力の交換であつて、その現実的、意識的な、真の定在は社会的な活動であり、社会

的な享受である」(S. 535~536)。後に述べるように、「評註」は、分業、交換において表示されている人間の社会的諸活動を根源的には以上の如くとらえたうえで、かかる見地から、市民社会における分業・交換を「人間の社会的交通の疎外された形態」として規定するのであるから、この点を確認しておくことは重要である。

また「ミル評註」は、以上の労働観・人間観に対応して、「国民経済学」の市民社会把握批判の基礎となる、次のような社会観をうちだしている。「人間の本質は、人間は真に、共同的な存在であるという点にあるから、人間はその本質の活動によつて人間的な共同体、つまり、個々の人間にたいして決して抽象的な力となることなく、それ自体個々人の本質であり、かれら自身の活動、かれら自身の生活、かれら自身の精神、かれら自身の富であるような社会的な組織を創造し、産み出す」(S. 536)。

かかる社会観は、政治国家と市民社会の分裂という近代社会に特有の二元論の批判——その発端は『ヘーゲル国法論批判』にみいだされ、「ユダヤ人問題」の中心主題となる——⁽¹⁶⁾の思想的基礎として、若きマルクスの諸論著のなかに早くからその姿を現わしている。だが「その本質の活動によつて」という一句その他からもうかがえるように、ここでも把握の中心が、人間の類的活動⇨労働に凝集しつつあるのが、記憶さるべきである。

「ミル評註」の叙述に散在する以上の諸規定は、評註の叙述の殆んど最後に位する一断片において、みごとに総括されている。すなわち「評註」は、おそらくフョエルバッハへの一批判をめざしつつ、労働こそフョエルバッハのいわゆる我と汝との統一を媒介する契機である、との基礎視角を前面に押し出して、この点について次のように言っている。

「われわれが人間として生産したと仮定しよう。そうすれば、われわれはそれぞれ自己の生産で、自己自身と他

人とを二重に肯定したことになる。(一)私は私の生産において私の個性とその独自性とを対象化する。したがってその活動の間に個人的な生命発現をたのしむとともに、対象物の観照において、個人的な喜びと私の人格性とを対象的な、感性的に観照しうる、またそれゆえに疑問の余地のない力として知ることを味わうであろう。(二)私の生産物を汝が享受あるいは使用することのうちに、私は私の労働によつて人間的な欲求を充足し、人間的な本質を対象化し、他の人間的な存在の欲求にそれにふさわしい対象を供給したと意識し、(三)汝にとつて私は汝と種族(Gattung)との媒介者であつたと感じ、したがつて汝が私を汝の固有の本質の補足物、汝自身の不可欠の部分であると悟り、感じており、したがつて私が汝の思惟と身体とにおいて、確認されていると意識し、(四)私は私の個人的な生命発現によつて直接に汝の生命発現をつくりだし、したがつて私の個人的な活動のうちに私の真の本質、私の人間的な本質、私の社会的な本質を確証し、実現したと意識する喜びを直接に味わうであろう」(S. 564-567)。

かくて「評註」はいまや言う、「生産は、それをとおしてわれわれの本質が明らかにされる、いわば姿見である」(S. 567)と。

さて「ミル評註」は、「国民経済学」の功利主義的性格の批判をめざしてなしとげられた以上の労働観、人間観、社会観に立つて、私的所有を前提にする市民社会では、人間の類的生活、共同体はありのままの姿では現れないで、「疎外された形態」をとつて現れると考える。⁽¹⁷⁾そして「評註」によれば、「国民経済学」のイデオロギ一性(虚為意識)は、この人間の類的生活の歴史的に規定された「疎外された形態」を固定化し、これを人間の経済生活の永遠の存立条件と考えた点にあつた。すでに前節でも述べたように、「国民経済学」は交換、分業を市民社会の公益性を示すものとして讚美したが、「評註」はこれを「人間の社会的交通の疎外された形態」(S. 567)と

してつかむ観点から、「国民経済学」の基本的性格に、次のような原理的な批判を加える。

「国民経済学は人間の共同的存在を、すなわち自己活動的な人間存在を、つまり類的生活、真に人間的な生活のための相互的な補足を、交換ならびに取引の形態のもとに理解している。……国民経済学が社会的交通の疎外された形態を、人間の本分にふさわしい、本質的で根源的な交通として固定化していることは、明らかである」(SS. 536~537)。

いまや「シル評註」は、この点を具体的に示すために、私有財産を軸にする近代市民社会は人間の類的生活の疎外された形態である、という観点から、「国民経済学」の展開する諸範疇——分業、交換、価値、貨幣等——は、その真の内容についていえば、人間の類的活動の外在化の展開過程にはかならないことを明らかにし、またそれによつて、この経済学の止揚の基本的方向をはやくもうちだしている。以下節をあらためてこの点を論じたい。

- 註(1) K. Marx, *Zur Kritik der politischen Ökonomie*, Berlin 1951, S.235. 邦訳『国民文庫版』二七一頁。
 (2) Vgl. K. Marx, *Ökonomisch-philosophische Manuskripte* (1844), in *MEGA* Abt. I, Bd. 3, SS. 107~109. 邦訳『マル・エン選集補巻4』三三〇頁—三三三頁。
 (3) K. Marx, *Das Kapital*, Bd. I, Berlin 1953, S. 51. 長谷部訳『第一部(上)』一三二頁。
 (4) *Ebenda*, S. 51. 邦訳『同上』。
 (5) L. Feuerbach, *Grundsätze der Philosophie der Zukunft*, in *Kleine philosophische Schriften*, Leipzig 1950, S. 168. 邦訳『岩波文庫版』一四三頁。
 (6) K. Marx, *Ökonomisch-philosophische Manuskripte* (1844), in *MEGA* Abt. I, Bd. 3, S. 156. 邦訳『マル・エン選集補巻4』四〇三頁。
 (7) 杉原四郎、『『ミルとマルクス』』七〇頁。
 (8) 例えば『ドイツ・イデオロギー』は言う、「フオイエルバッハは、『純粹な』唯物論者にくらべると、人間もまた『感性的な対象』であるということのみをみぬいている点で非常にすぐれている。しかしながら、人間というものをただ『感性的

初期マルクスの一考察(重田)

九二

対象」としてのみとらえて『感性的活動』としてとらえてはならない……」(Marx-Engels Werke, Bd. III, S. 44. 邦訳、岩波文庫版、六二—六三頁)。

(9) K. Marx, *Ökonomisch-philosophische Manuskripte* (1844), in *MEGA*, Abt. I, Bd. 3, S. 88. 邦訳、ヤン・エン選集補巻4、三〇六頁。

(10) *Ebenda*, S. 88. 邦訳、同上頁。

(11) 史的唯物論の基礎視角の端緒の確立に照応して、すでに四四年『手稿』では、断片的ではあるが、(1)生産関係範疇の端緒の把握、あるいは、(2)「社会の土台と上部構造との関係」の洞察等がみいだされる。例えば(1)については、Wolfgang Jahm, *Der ökonomische Inhalt des Begriffs der Entfremdung der Arbeit in den Frühschriften von K. Marx*, in *Wirtschaftswissenschaften*, Nr. 6, 1857, S. 854. (2)については、杉原四郎『マルクスの「社会とマルクス」七七頁—七八頁参照のこと。

(12) 例えば『ミル評註』では、「類的生活(活動)」、「共同的存在」、「社会的交通」、「全体的な存在」等、という概念が頻出し、これらはすべて人間の本質、あるいはその「運動」であるといわれる。

(13) この点については、白杉庄一郎、『価値の理論』五〇頁—五三頁参照。

(14) 『賃労働と資本』についてはマルクス、エンゲルス二巻選集第一巻(ヘルリン、一九五三年)、七〇頁—七一頁(邦訳、マル・エン選集二巻、二三四頁—二三五頁)、『資本論』については本節註(3)、『ユータ綱領批判』については同上選集第二巻、一七頁(邦訳、同上二巻、二四三頁)参照のこと。

(15) この観点はさらに『ドイツ・イデオロギー』の、「ところで生活の生産は、そのまますぐに二重の関係として——一方では自然的な、他方では社会的な関係として——あらわれる。ここに社会的というのは、どんな条件のもとにしても、どんな様式によるにしても、またどんな目的のためにしても、いくたりかの個人の協働という意味である」(Marx-Engels Werke, Bd. III, SS. 29~30. 邦訳三六頁)、「という観点に連つてゆくことが注目されていなければならない。なお『ドイツ・イデオロギー』では生産関係、生産様式範疇は、しばしば「交通関係」、「交通形態」、「交通様式」とも呼ばれていることに注意。

(16) 「ユダヤ人問題によせて」についてはマルクス・エンゲルス著作集第二巻(ヘルリン、一九五七年)、三七〇頁(邦訳、マル・エン選集補巻4、一六一頁)、『ヘーゲル国法論批判』については同上、二三〇頁—二三四頁(邦訳、マル・エン全

集一卷、二八一頁―二八五頁）参照のこと。なお『神聖家族』（第六〇、b ユダヤ人問題。第三）において、この近代市民社会に特有の政治国家と市民社会との二元論批判の問題が再出するが、この時期の経済学の研究に媒介されて、批判の定式化がいつそう鋭くなつていくことに注意。

(17) 「ミル評註」は言う、「人間が人間として認められず、したがって世界を人間的に組織していないかぎり、この共同性は疎外された形態のもとに現われる」(S. 536)。

三

この点の分析に入るに先立つて、再び二・三の予備的な考察をつけ加えておきたい。

近代市民社会を人間の類的生活の疎外された形態としてつかみ、これに批判的な分析を加えるにあたって、周知のように若きマルクスは、フョイエルバッハの次の理論、すなわち、キリスト教の本質を人間のそとに外在化された人格化された人間それ自体の類的本質であると説き、人間解放の中心課題をこの疎外された類的本質の奪還にもとめ、これを神にたいする愛にかわる人類愛によつておこなおうとした、疎外の理論を承け継いだ。とともにコルニユの言葉を借れば、若きマルクスは「この外在化を宗教的な立場からよりも、むしろ政治的、社会的な立場から考へ察し」、「それは神においてばかりか、国家においても表出されていると考へ、したがつてその止揚は宗教と国家との同時的批判によつてのみおこなわれうる、と考へた」⁽¹⁾点で、すでにフョイエルバッハを超えていたといわれる。

ところで疎外をこのようにすぐれて社会的な性格をおびたものとしてとらえるにさいして、かれに影響を及ぼしたものと、われわれは、ここでも再びヘーゲルを考慮に入れなければならない。いま詳論の余裕はないが、四年『手稿』がヘーゲルの『現象学』にくだした次のような解釈、すなわち、「そのことはただ思想形態においておこ

つているにすぎないが」との留保をおきつつも、「ヘーゲルは、例えば富、国家権力等々を人間的存在から疎外された存在として扱っている」といつているのが、その点で示唆に富んでいる。

再びコルニユについていえば、かれは、マルクスが社会主義の立場から、経済・社会的な形態における人間の活動・労働の疎外の根拠を私有財産制度に求めるに至った次第については、モーゼス・ヘスの空想的共産主義の思想、とりわけ論稿「貨幣の本質について」の影響を重視している。

ところでドイツ古典哲学の精髓「疎外の理論のかかる方向への深化は、はやくもすでに草稿『ヘーゲル国法論批判』において本格化し、続いて『独仏年誌』の二論稿、とりわけ「ユダヤ人問題によせて」がこれを精力的に追求したところであつた。だがこれらの諸論稿では、論及の中心をなす人間の自己疎外の問題は、なお主として、人間の生活の政治的国家(そこでは人間は共同的存在であるとみなされる)と市民社会(そこでは人間は私人として行動し、生活する)とへの分裂、人間それ自体の公人と私人とへの分裂という視角から論じられ、その根拠たる、市民社会そのものにおける人間の類的生活の疎外態の分析が欠けていた点で、それらはなお大きな制約をうけていた。とはいふものの、しばしば言及されるように、「ユダヤ人問題」は貨幣の本質について、これを「人間から疎外された人間の労働および人間の定在の本質である」と説くことによつて、分析視角の前者(人間生活の政治国家と市民社会への分裂)から後者(市民社会そのものにおける人間の類的生活の疎外の分析)への深まりを準備していることが看過されてはならない。そしてその点からいえば、「ミル評註」を一環とする若きマルクスの「国民経済学」の批判的分析は、「ユダヤ人問題」の貨幣把握その他にみられる、市民社会における人間の類的生活の疎外の端緒的分析を、いつそうおし進めたものにほかならないのであつて、いまやここに「ミル評註」を媒介にして、「国民経済学」の研究とドイツ

古典哲学の研究とは、若きマルクスにおける独自の社会主義的立場のいつその深化の立場から、一点に合流せしめられるに至った。

というのはこうである。まず第一に、「ミル評註」はすでに述べた労働観に依拠して、これまでの論稿ではたんに人間の自己疎外として論じてきたものを、「人間の類的生活の疎外」、つまり「労働の自己疎外」というつきつめたかたちでつかむことによつて、「ユダヤ人問題」では私的人間の利己的活動としてなお抽象的につかまれていた市民社会の人間の労働ならびに労働の諸関係を、いまやいつそう厳密に、つまり「疎外された労働」という歴史的に規定された特定の労働形態として、あるいはまた人間の類的生活の疎外態として把握するためのがかりを、わがものとするに至った。

では労働の自己疎外、あるいは疎外された労働とはいかなる事態をさしているのであろうか? 「ミル評註」は市民社会における人間の労働の根本的な問題性として、次のような事実の洞察に達する。まず労働そのものについていえば、私的所有を前提にする市民社会では、人間は生きるために、生活手段を獲得するためにのみ労働することによつて、「生命の自由な発現」としての労働は、「生命の外在化」、「強制された労働」に、「内的必然的欲求にもとづく」労働は、「外的偶然的な必要による」労働になつている。他方では労働のかかる疎外された労働への転化に対応して、市民社会では、「人間の活動の創造物」は「彼にとつて疎遠な力」と化し、「人間の創りだした富」は「創り出した者の貧困」となつて現われ、「人間を他の人間と結びつける本質的な紐帯」は「非本質的な紐帯」、「人間他の人間からの分離」に転化していることが認められる。かくて第二に、いまや「評註」は、市民社会における労働ならびに労働の諸関係の以上のような洞察にもとづき、「国民経済学」の展開する諸範疇の真の内容は、人間の類的生活の外在化の過程にはかならないと主張することによつて、市民社会の「公益性」を論証しようとする

る「国民経済学」のイデオロギー性を明るみにだすとともに、またそれによつてこの経済学の止揚の方向を明らかにする。

さて「ミル評註」は、さしあたりこの課題を、ミルの『綱要』における貨幣の本質規定を念頭におきつつ、「ユダヤ人問題」においてなされた独特の貨幣の本質規定をいつそう徹底せしめる形で遂行する。すなわち「評註」は、貨幣の本質をすぐれてその交換手段機能において規定したミルの規定⁽⁶⁾を、「それはまことにみごとで、また問題の本質を理解している」(S. 531)と一面では肯定しつつも、他面ではフォイエルバッハのキリスト教批判の方法に倣つて、この貨幣を神人媒介者としてキリストの地位、機能になぞらえつつ、疎外論の視角から、さきのミルにおける交換手段としての貨幣の本質規定の真の内容は、実は人間の類的活動の外在化にはかならないことを明らかにして、ほぼ次のように言つている。⁽⁷⁾

すでに一言したように、もともとと交換の本質は、生産過程における労働の交換と同様に、人間の類的活動の交換の一形態であり、人間の社会的交通の一形態である点にあつた。ところが私的所有のもとでは、人間のつくりだしたものが相互に補足されあうところのこの社会的な行為が外在化されて、その結果、もともと人間の類的活動の一属性であるこの媒介する運動が、人間の外にある、ある質料的なものの属性になる。「評註」によれば、かかる属性をもつに至つたものが貨幣にはかならない。他方人間は、宗教的世界(意識の世界)において自己の類的本質を神人媒介者としてのキリストに譲渡することによつて、それ自体は無力な存在に化したように、経済的世界(現実の世界)でも、人間はさきの媒介する運動を自己の外にある物象に譲渡することによつて、それ自体は自己を喪失した、非人間的な人間になり、その結果、もともと「自己の意志」、「自己の活動」、「自己の他の人間にたいする関係」の外

在態にはかならない物象の運動に自己を従属させ、これを自己から全く独立した力として眺める。

以上のように「ミル評註」は、貨幣をすぐれて交換手段機能においてとらえたミルの貨幣把握の内容に、疎外論の視角から検討を加えることによつて、「ユダヤ人問題」で端的に把握された貨幣の本質についての独自の規定に、いつそう詳細な内容づけを与えるに至つた。だがしかし前者はさらにつきの点で、後者に較べて、画期的な前進を遂げている。すなわち「評註」は、さらに一步踏みこんで、貨幣発生の根拠である人間の類的活動の疎外を、市民社会の前提である私有財産と結びつけることによつて、私有財産——交換——価値——貨幣という「国民経済学」の範疇展開が、人間の類的活動の外在化の展開過程にはかならないことを指摘し、そのことによつて、「これらの諸範疇の全展開を単なる事実としてとらえ、偶然的な必要の所産としてしか把握できない」(S. 520) 「国民経済学」と異つて、それらの諸範疇が私的所有と結びついた特定の範疇(歴史的な範疇)であることを明らかにしている。

まず「ミル評註」の一節は、この点について次のような自問自答を展開している。「私有財産はなぜ貨幣態(Geldtwesen)にまでゆきつかねばならないのであろうか? それはこうである、人間は社会的な存在として交換にまでゆきつかねばならないし、私的所有を前提にすれば、交換は価値にまでゆきつかねばならぬからである」。さらにこの点を敷衍して言う。「すなわち交換をおこなう人間の媒介的な運動は、社会的な運動でもなければ、人間的な運動でもなく、また人間的な関係でもない。それは私的所有と私的所有との抽象的な関係である。そしてこの抽象的な関係が価値であつて、この価値の価値としての現実的な実存こそ、まさに貨幣である」(S. 532)。

以上に引用した私有財産——交換——価値——貨幣という経済学諸範疇の規定をとおして、いまや「ミル評註」が、「国民経済学」の諸範疇の内実は人間の類的活動の外在化の過程にはかならない、という観点に立ち、かかる観点

から、これらの諸範疇を、ひとたび私的所有が措定されるや、その他の諸範疇は一定の論理必然的な順序でもつて措定される関係にある諸範疇としてとらえ直そうという、独自の構想をうちだしていることは明らかである。だがそれとともに、引用したかぎりのものでは、その説明はなおはなはだ抽象的である。

ところで「評註」はこの点について、他の箇所ではいまいし詳細に、この構想を述べている。すなわちそこでも再びさきに引用したのとほぼ同一の範疇規定によつて貨幣發生の必然性を明らかにしようとする試みつつも、いまやこれらの諸範疇の間の移行の契機を私有財産の外在化という規定にもとめて、さきの範疇規定は私有財産の外在化という規定の展開過程であると説き、しかもこの過程が、そのまま、人間の類的活動の外在化の過程にはかならないことを明らかにしようとする。⁽⁸⁾⁽⁹⁾

すでに述べたように、私有財産の基礎にある労働は疎外された労働であつたが、それに対応して、私有財産の本質は「人間の外在化された類的生活」であることを、「評註」はまず確認する。かかる前提に立つて、「評註」は交換について、これを「私的所有者の双方の側から措定される相互規定的な外在化の関係」として規定する。そして「評註」によれば、価値とはかかる私有財産の外在化の成果として析出されたもの、つまり「外在化された私有財産」の一規定であつて、貨幣はこの外在化された私有財産の規定の「対自化」にはかならない、とされる。かくて「評註」はさきの私有財産―(交換)―価値―貨幣という経済学的諸範疇の展開を、私有財産Ⅱ人間の外在化された類的生活という前提に立つて、私有財産―(「私有財産の相互規定的な外在化の関係」)―「外在化された私有財産の規定」―「外在化された私有財産の規定の対自化」という展開においてとらえる。

では価値が外在化された私有財産の規定にはかならぬことが、私有財産の外在化の関係である交換過程のいかな

るプロセスをとおして析出され、明らかにされるであろうか。「評註」は次のような独自の交換過程論ともいへべきものを展開する。「私有財産は他の私有財産と関連せしめられ、これと等置される。かれの私有財産の位置には他の本性をもつた私有財産が入りこみ、それ自体は他の本性をもつた私有財産の位置を代表する。かくて双方の側において私有財産は他の本性をもつた私有財産の代表者として、つまり他の自然生産物(Naturprodukt)の同、等物として現われ、したがって双方の側はおのおのかれの他、者の定在を代表し、またおのおのはこもかれ自身およびかれの他者の代理人として相互に関係しあう。かくてそのものとしての(als solchen)私有財産の定在は *Ersatz*、つまり等価物(Aquivalent)になる。直接に自己自身との統一においてあるかわりに、私有財産はいままでではもはや他の私有財産との関係として存在しているにすぎない。かくて私有財産は価値、直接には交換価値となる」(S. 538)。

いまや「ミル評註」は以上の分析の成果として、価値を規定して次のように言う。「価値としての私有財産の定在は、私有財産の直接の定在と区別された、私有財産に特有の本質にとつては偶然的な規定であり、私有財産それ自体の外在化された規定であつて、この規定の相対的な定在であるにすぎない」(S. 538)。また貨幣は、外在化された私有財産の規定としての価値が「対目的になつた実存」にはかならない。「評註」は言う、「私有財産の外在化の規定が、すでに等価物、価値のなかにあつたように、貨幣はこの外在化の感性的、自己対象的な定在である」(S. 540)。あるいは言う、「すでに私有財産と私有財産との社会的な関係は私有財産の自己疎外された関係である。だからこの関係が対目的になつた実存、すなわち貨幣は、私有財産の外在化であり、それに特有の人格的本性の捨象である」(S. 532)。

かくて「評註」は、貨幣がその本質において人間の類的活動の自己疎外の一応の完成態である、という点に、再び一

だが以上の分析に支えられ媒介されたかたちで——たちかえつて、次のように言う。「貨幣において、つまり素材の本性や私有財産の特殊な本性にたいして、そしてまた私有財産の人格的本性にたいしても全く無関心なもの(Chalchali, *Chalchali*)において、人間にたいする、疎外された物象の完全な支配が現われる」。もともと人間の人間にたいする支配としてあるべきものが、いまや物象の人間にたいする、生産物の生産者にたいする普遍的な支配となつている(S. 50)。

さて以上のように、「ミル評註」は、私有財産即「外在化された人間の類的生活」という前提に立ち、また交換が「私有財産の外在化の関係」であることを明らかにし、これらの上に立つて、私有財産——価値——「外在化された私有財産の規定」——貨幣——「外在化された私有財産の規定の対自化」という展開をおこなうことによつて、「国民経済学」における交換、価値、貨幣等の諸範疇が、その本質において、人間の類的活動の外在態にはかならぬことを追求した。「ユダヤ人問題」において端的につかみだされた貨幣の物神性把握が、「評註」における「国民経済学」の基礎的諸範疇のこの批判的分析を媒介にして、いかに飛躍的に前進をとげたかははやいうまでもない。

だがちなみに一言しておけば、疎外の理論にもとづく貨幣の発生 of 必然性の追求のなかで、——なお萌芽的、という限定を附して——ではあるが——貨幣がともかく価値の自立姿態としてつかまれていることは明瞭である。しかるに四四年『手稿』にのみよつたという制約にもとづく点もあるが、A. ベナリ、H. グラウは、パリ時代のマルクスの貨幣把握を評価して、一方では「貨幣の物神性把握の確立」はこれを承認しながらも、他方ではこの把握の限界として、「貨幣を一般的等価として認識しているなどとはとつていいられない」⁽¹⁰⁾、と述べているが、このような評価は、やや一面的である、といわねばならない。

論をもとにもどす。すでに第一節で述べたように、「国民経済学」にあつては、分業と交換こそ市民社会の公益

性を端的に示す範疇であつた。しかるに「ミル評註」によれば、分業、交換のかかる範疇的把握こそ「国民経済学」のイデオロギーの性格を示すものであつて、それらは人間の社会的交通の疎外された形態にほかならなかつた。交換についてはすでにこの点を明らかにしたが、分業についても「評註」はこの点を指摘して言う。「人間の活動の生産物の相互的な交換が交換取引、暴利商業として現象するように、活動それ自身の相互的な補足と交換とは分業として現象する。……社会的な組織はその反対物としてのみ、つまり疎外の形態をとつて存在するのであるから、まさに人間の労働の統一は分割としてのみ考察される」(S. 540)。

さて、市民社会における人間の諸関係のもつとも基礎的な結節点たる、分業と交換とを右のようにとらえたうえで、「評註」は、これまでの論述の総括を示すかの如く、この分業あるいは交換を媒介にして、「生産物の価値としての生産」と、その根底にある歴史的に規定された特定の労働Ⅱ「疎外された労働」との関連についての、断片的な叙述を遺している。

まず「評註」は、疎外された労働と交換との関連について、「交換関係を前提にすれば、労働は直接に営利労働(Erwerbsarbeit)になる」と述べ、続いて次のように言っている。「交換によつて労働は営利の源泉となつた。かくていまや労働の目的と定在とは様々なものになつている。生産物は価値、交換価値、等価物として生産されるのであつて、もはや生産者にたいする直接に人格的な関係のために生産されるのではない。生産が多面的になればなるだけ、したがつて一方では生産者の欲求が、他方では生産者の仕事が多面的になればなるだけ、いつそう労働は営利労働の範疇に入り、遂には労働はもはやこのような意義しかもたないで、生産者が自己の生産物にたいして直接的な享受や人格的な欲求の關係に立つかどうか、あるいは活動すること、労働の行為それ自体がかれにとつて人格性

の享受であり、自然的資質の現実化であり、精神的目的であるかどうかは、全く偶然、で非本質的なものになつてゐる」(S. 539)。

また「評註」はすでに述べた分業把握に立つて、分業と営利労働、生産物の価値としての生産との関連を総括して、次のように言つている。「分業を前提すれば、その内部では私有財産の素材をなす生産物は、個人にとつてますます等価物たるの意義をおび、いまや個人々人はもはや剰余物を交換にだすのではなくて、生産の対象物が彼にとつて全く関心がなく、(gleichgültig) のと同じように、彼はもはや彼の生産物を自己の必要とするものと直接に交換しない。等価物は等価物としての実存を貨幣のうちに受けとる。いまや貨幣が営利労働の直接の結果であり、交換の媒介者である」(S. 540)。

われわれは、さきに「評註」が、「国民経済学」の展開する諸範疇は人間の類的活動の疎外態にはかならぬことを明るみにだすに至つたプロセスを明らかにしたが、そのことはまた、いまやマルクスはこれらの諸範疇を私的所^①有と結びつけたすぐれて歴史的な範疇として把握するに至つた、ことを意味するものであつた。右に引用した二つの総括的叙述は、価値、貨幣等の諸範疇、あるいはその基礎にある労働範疇^②、営利労働が、私的所有を前提する特定の分業制度、交換関係と結びついた歴史な範疇であることを直載に述べることによつて、この点(経済的諸範疇の歴史性)をいつそう端的に示しているといふことができる。いまやパリ時代のマルクスが、「国民経済学」の批判の基準をどこに求め、いかなる方法原理にしたがつて、この経済学を止揚しようと企図するに至つたかが、ほぼその大筋において明らかになつた。

註(一) A. Cornu, *Karl Marx und Friedrich Engels, Leben und Werk*, Bd. I, Berlin 1954, S. 418.

(二) K. Marx, *Ökonomisch-philosophische Manuskripte* (1844), in *MEGA*, Abt. I, Bd. 3, S. 154. 邦訳『マルクス・

選集補卷4、四〇〇頁。

(c) Vgl. A. Cornu, *a. a. O.*, S. 523, S. 533, S. 546.

A. Cornu, *Karl Marx, Die ökonomisch-philosophischen Manuskripte*, Berlin 1955, S. 7, S. 9.

例えばロルニヒは『K・マルクスとF・エンゲルス』で言う「ルスの論文（『貨幣の本質について』——筆者註）は、その欠陥にもかかわらず、マルクスに過小評価してはならない影響をおよぼした。いまやそれは、エンゲルスの経済学についての論稿とあいならんで、かれが新たに手に入れた共産主義の理論を経済学的に基礎づけるためのがかりを提供した。マルクスはいまやこれらの影響のもとに、疎外を政治——社会的な立場から、そしてまた経済——社会的な立場から考察した」（S. 523）。

なおこの点については、拙稿「初期マルクスと青年ヘーゲル派——初期マルクス研究に関する一展望」（『経済論集』第七巻、第七号）第四節参照。

(4) K. Marx, *Zur Judenfrage*, in *Marx-Engels Werke*, Bd. II, S. 375. 邦訳『ル・エン選集補卷4、一六七頁。

(5) Vgl. MEGA, Abt. I, Bd. 3, S. 537, S. 539, S. 547.

(6) Vgl. James Mill, *Element of Political Economy*, 3rd ed., London 1826, chap. 3, sect. 6, pp. 128~130.

(7) Vgl. MEGA, Abt. I, Bd. 3, SS. 531~532.

(8) 「ミル評註」は、「私有財産の外在化」という規定について、次のように言っている。「私が私の私有財産を他人に譲渡するばあい、それは私のものであることをやめる。すなわちそれは私から独立した、私の領分の外にある物象、私にとって外的な物象になる。かくて私は私の私有財産を外在化する」（S. 537）。また「外在化された私有財産」という規定については、「私有財産が私の私有財産であることをやめながら、だがそれにもかかわらず私有財産一般であることをやめないばあい、つまりそれが私の外にある他の人間にたいして、かつてそれが私にたいしてもつていたと同一の關係をもつてあらわれるばあい、一言でいえば、それが他の人間の私有財産となつてゐるばあい、それは外在化された私有財産となつてゐるにすぎない」（S. 537）と言ひ。

ちなみに一言しておけば、ルカーチは、「外在化」「疎外」という言葉が、「売却」「譲渡」という言葉（但しマルクスはここでは *ablassen* を用ゐている）に由来することを説いて、次のように言つてゐる。「もともと『外在化』、『疎外』という表現は決して新しいものではない。それらの表現は全くのところ“alienation”という言葉のドイツ語訳であつ

初期マルクスの一考察（重田）

て、この言葉は、イギリスの経済学では商品の売却 (Veräußerung) の関係に用いられ、またほとんどすべての自然的な社会契約理論では、原初的自由の喪失 (Verlust) の関係、つまり契約から生れる社会への、原初的自由の譲渡 (Übertragung, Veräußerung) の関係で用いられる (Der junge Hegel, Berlin 1954, S. 613.)。

(9) 以上の外在化の規定に立つて、「ミル評註」は交換について、次のように言っている。「したがって交換あるいは交換取引は、私有財産の内部での社会的な行為、類的行為、共同的组织、社会的な交通、人間の統合であり、またそれゆえに外的な類的行為、外在化された類的行為である。……それは社会的な関係の反対物である。」(S. 538)。

(10) A. Benary/H. Graul, Zur Entstehung der ökonomischen Lehre von Karl Marx, in *Wirtschaftswissenschaften*, Nr. 3, 1954, S. 328.

四

以上、われわれは、これまでの初期マルクス研究では比較的等閑視されてきた「ミル評註」が、注目すべき幾多の論点を含んでいることに着目して、若きマルクスにおける「経済学批判への端緒」確立の視角から、これに積極的な意義を賦与しようと試みてきた。だがそのために、「評註」のもっている限界が見失われてはなるまい。なるほど「評註」は、「国民経済学」の基本的な性格に根本的な検討を加えることによつて、そのイデオロギー性を明らかにひきだすとともに、それによつて、この経済学の止揚の基本的な方向を明らかにした。本稿の考察の主題もまたそこにあつたが、しかし経済学そのものとして見れば、「評註」の叙述は、なおはなはだ未成熟であることは否定されうべくもない。これについては、幾多の面からこれを論ずることもできようが、本稿の主題はそこにはないので、いまは二つの論点にかぎつて、簡単に触れておきたい。

『剰余価値学説史』は、リカードの価値論を批評して、次のように言っている。「リカードは、価値の大きいさの

みをとらあつかい、したがつてその注意を、さまざまの商品で表現され、これらの商品の中に価値として体化されて含まれている、労働の相対的な量にのみ注いでいる点で、誤りをおかしている。だがしかし商品に含まれている労働は社会的、労働として、外在化された個別的労働として表現されねばならない。……諸商品に含まれている私的個人の労働の、同、等、な、社、会、的、労、働、へのこの変態、したがつてまたあらゆる使用価値で表現することのできる、一切の使用価値と交換することのできる労働としての同、等、な、社、会、的、労、働、へのこの変態、——リカードにあつては、貨幣としての交換価値の表現に含まれている、問題のこの質的側面が展開されていない。この事情を——諸商品に含まれている労働を同、等、な、社、会、的、労、働、として、すなわち貨幣として叙述する必要を——リカードは看過している⁽¹⁾。

また言う、「諸商品はすべてその統一態としての労働に分解されうる。リカードが研究していないものは、労働が商品の統一態として現われる特殊な形態である。それゆえにかれば貨幣を理解しない。したがつてかれにあつては、商品の貨幣への変態はたんに形式的なあるものと見え、資本制生産の内奥に深く喰い入っているものとは見えない⁽²⁾」。

すでに述べたように、経済的諸範疇の全展開を「単なる事実としてとらえ、偶然的必要の所産としてしか把握できない」(S. 530)「国民経済学」と異つて、「ミル評註」は、人間の類的活動の自己疎外の視角から、これらの諸範疇が、私的所有と論理必然的に結びついた諸範疇であることを明確にし、なお萌芽的な形ではあるが、貨幣を価値の自立姿態としてとらえるべく試みていた。したがつて、貨幣を「商品の交換価値の自立化⁽³⁾」として、したがつてそれ自体「交換過程の産物⁽⁴⁾」としてとらえるというかぎりでは、「ミル評註」は、リカード価値論に集中的に示されている「国民経済学」の根本的な欠陥が那邊にあり、如何なる方向に克服すべきかについて、『剰余価値学説

史』の批判の根本的な方向の原型を、すでにうちだしているのであつて、この点は明確にしておかねばならない。ところでこのリカードの価値論の根本的欠陥の科学的な解決は、さきの『剰余価値学説史』からの二つの引用文からも明らかのように、「経済学を理解するための軸点」をなすといわれる、「商品に含まれている労働の二者斗争的な本性」の把握を前提にする。この「労働の二重性」把握に視点をあげば、われわれは「評註」の中にその萌芽すらみだしえない点で、「評註」は、経済学としては、なお根本的な欠陥をもつていたことを認めなければならぬ。あるいはそれへの発端を、市民社会の労働を疎外された労働としてつかむ見地のなかにみることができない。あるいは、そのばあいにもわれわれはそれ以上のでがかりを、「評註」から探り出すことができない。しかもマルクス自身の言明によれば、この労働の二重性が「はじめて批判的に指摘された」のは、『経済学批判』（一八五九年）においてであつて、その間には、約十五年にわたるマルクスの刻苦にみちた研究の過程がよこたわつていた。いまその間の里程碑を明らかにする余裕はないが、この点は充分留意されなければならない。

またしばしば触れたように、「ミル評註」は、「国民経済学」のイデオロギー性を端的に示す範疇として、交換と並んで、分業に多大の注目を払つた。ところでわれわれは、「評註」のそれとほぼ同一の分析視角から——だがいま少し立ち入つて——なされた分業把握を、四四年『手稿』の中にみいだすことができる。この四四年『手稿』の分業把握について、杉原教授は、その積極的意義を十分に評価しつつも、そのもつ限界を、後のマルクスの諸論著と対比しながら、①「分業が一般に生産力と生産関係との媒介環として有する意義の解明については、『ドイツ・イデオロギー』におけるほどの整備された叙述をわれわれは『手稿』の中に見出すことはできない」、②「いわんや資本主義的分業を相対的剰余価値生産の爲の一形態としてとりあつかう『資本論』の分析方法のごときは、剰余価値論の明確な論理をもたぬ『手稿』に期待することはできない」、という二点から明らかにし、全体としてこの

分業把握の中に、「マニユファクチュア段階をいまだ十分脱却していなかつた一八四〇年代初頭のドイツ（乃至フランス）の現実の反映」を読みとろうとしておられるが、四四年『手稿』における分業把握にたいするこの評価は、そのまま「評註」の分業把握にも妥当するであろう。

以上の諸点に例証される、経済学として眺めたばあいの「ミル評註」の限界を十分わきまえたうえで、前節までの「評註」の考察から、とくにその積極的意義と思われるものに力点を集中して若干の結論をひきだせば、次のようになるであろう。

マルクス経済学を他の経済学から区別する方法的な特質の一つは、前者は物神性の概念によつて、資本制社会の経済的諸形態——商品、貨幣、資本、利潤、利子、地代——およびそれら相互の諸関係の歴史的に独自の特質を規定づけている点にある。したがつてこれまでの初期マルクス研究においてもこの点に着目して、「ユダヤ人問題」や四四年『手稿』から「貨幣の物神性」把握の端緒を、あるいは四四年『手稿』から「資本の物神性」把握への発端をとりだす試みがなされてきた。⁽⁹⁾

いまかかる展開の線に沿つて「ミル評註」を眺めるばあい、ここでも貨幣の物神性把握が検討の中心になるであろうが、そのさい「評註」の把握は、「ユダヤ人問題」に較べて、次の点で決定的な前進をとげることがまず注目される。すなわち前節で明らかにしたように、ここでは後者の如く、貨幣を「人間から疎外された人間の勞働および人間の定在の本質」として直接に規定しないで、ドイツ古典哲学の精髓——疎外の理論の独自の批判的摂取にもとづく立場から、「国民経済学」の基礎的諸範疇に全面的な批判を加え、それが人間の類的活動の自己疎外にほかならぬことを明らかにすることによつて、これを媒介的に規定しようと試みたことが、すなわちこれである。

もとより個々の点についてみれば、すでにその若干について見たように、その論証はなお欠陥の多いものであるが、私有財産——価値——貨幣という経済学的な範疇展開のなかに、人間の類的生活の疎外態の展開を見ようとするとその根本的な構想は、商品——価値——貨幣という経済学的な範疇展開のなかに、生産諸関係の物象化の展開を追跡する『資本論』の方法的原理に照応する論理を、そのウルティプスにおいてうちだしている、ということができる。そしてこの点が本稿の考察の基本線でもあった。

ところで、生産諸関係の物象化の論理としての物神性概念に結実する、若きマルクスにおけるさきの方法的原理の確立は、その成立過程からみると、「国民経済学」が陰に陽にそれと固く結びついていた功利主義的思想にかわる新しい思想的な基礎、つまり市民社会を疎外された社会とみうるような思想と論理の確立なくしては不可能であり、マルクスのばあい、それはドイツ古典哲学の批判的摂取と結びついてあらわれたことは、すでに関説したところである。かくて「ミル評註」は、経済学としては、漸くここにその新しい独自の展開の端緒がきりひらかれたにとどまり、なおはなはだ未完成なものであるが、またそれだけに、この端緒を構築するにあたって必要とされた方法的原理の確立をめざして苦斗する若きマルクスの姿が、あざやかに映しだされていて、そのために、マルクス経済学における経済学と哲学との交渉関係が、いわばその生成過程における躍動する混然一体の姿でわれわれの前に提出されている、ということが出来る。そして「ミル評註」が、若きマルクスの著作、論文、手稿のなかで占める独自の意義も、またこの点にあり、本稿が、「評註」における物象化の論理の原型の析出に考察の基本線をおきつつも、論をその基礎にある若きマルクスの人間観、労働観、社会観の確立の考察にまで広げたゆえんも、またここにある。

「ミル評註」をいろいろこの特質は、これをほぼ同じ時期にもされた他の経済学者にたいする「評註」や、四

四年『手稿』と比較してみたばあい、いつそう明確になるであろう。たとえば「リカード評註」をとりだしてみると、そこではリカードにおける自然価格と市場価格の問題、純収入の観点への偏りと総収入の観点の脱落、過剰生産恐慌の否定等に断片的な評註が加えられるにとどまつている。⁽¹⁰⁾もとよりそこでも以上の諸点への評註は、「国民経済学の非人間的な帰結」を白日のもとにさらす、という視角において統一されているが、「ミル評註」にみられるような、独自の新しい方法的原理の確立が前面に押し出されているわけではない。

四四年『手稿』についていえば、「国民経済学」批判の箇所では主としてスミスの『国富論』をとりあげ、批判はその諸命題の反対物への転化という視角から遂行されて、そのための方法的原理の確立は、おおむねヘーゲル『精神現象学』の批判の箇所にゆだねられている。いうまでもなく『手稿』は、両者を統一した独自の経済学創造の試みを示すものとして、「疎外された労仿」と題する草稿の断片を残して、ここでは、「われわれは疎外された労仿と私有財産との二つの要因のたすけをかりて、国民経済学の諸範疇を展開することができる」⁽¹¹⁾、との構想を披歴しているが、論をそこまで進めるに至っていない。

ところで近年の「ミル評註」をとり扱った文献をみるに、それらはさきのいわゆる混然一体となつたものうち、その一面を強調する傾きがある。すなわちD・I・ローゼンベルクは、さきの混然一体となつたものからその一面である後の整備された経済学諸範疇の萌芽をとりだすのに性急なあまり、「まだあまりに一般的な、主として社会学的な性格をおびているが」⁽¹²⁾、という言葉によつて、ややもすればこの萌芽を生みだした原理である方法的原理の確立の側面を軽視するという一面化におちいつている。他方M・リュベールは、「マルクスは決して新しい経済理論の推進者とはならないが、科学的な社会学の先駆者となるであろう」⁽¹³⁾、という立場から、さきにローゼン

ベルクが軽視した方法的原理を重視しつつも、かかる評価の立場に制約されて、この原理にもとずき、その直接の成果となつて現われた経済学批判への端緒確立の意義を見失うことによつて、ここでも再び両者の密接な交渉関係を統一的に理解していかないように思われる。もとより本稿も「シル評註」のかかる特質を浮彫りするのに成功したとは思われないが、以上の諸点に鑑み、この点を重ねて強調しておきたい。

註(1) K. Marx, *Theorien über den Mehrwert*, herausgegeben von K. Kautsky, Bd. III, Berlin 1923, S. 154. 邦訳『マル・エン全集』一巻、一六一頁。

(2) Eberda, S. 164. 邦訳『同上』一七〇頁。

(3) Eberda, S. 154. 邦訳『同上』一六一頁。

(4) K. Marx, *Das Kapital*, Bd. I, S. 46. 長谷部訳『第一部(上)』一二三頁。

(5) これに関連して若干の論点を追加しておく。本稿の「まえがき」の註(1)で述べておいたように、この時期のマルクスは、リカード、ミル、セイを「国民経済学」なる同一の範疇に入れていたが、これらの人々のかかる評価に対応して、ここではなおエンゲルスの「大綱」の、「現実価値を規定するものとしてセイは効用を、リカードとミルは生産費をあげる」という考え、また両者をもとに面的、抽象的として退ける考えが承継がれているかに思われる。したがつて、この時期のマルクスが、リカードにおける投下労力量による価値の大きいさの規定のもつ経済学的な意義を、どの程度まで内在的に撰取しうる状態にあつたかは、なお問題であつて、この点での限界は、貨幣の本質規定を、経済学的には、もっぱら流通手段機能にかかわらせて行い、貨幣の機能の第一規定である、価値尺度機能への言及が全然みられぬ、ことにも現われているかに思われる。

(6) K. Marx, *Das Kapital*, Bd. I, S. 46. 長谷部訳『第一部(上)』一六〇頁—一六一頁。

(7) この点については杉原四郎、『ミルとマルクス』八二頁—八三頁参照。

(8) 前掲書、八二頁。

(9) 例えば「ユダ人問題」については、A. Cornu, *Karl Marx und Friedrich Engels*, Bd. I, SS. 476~477. もろろは長州二二、『独仏年誌』におけるマルクス』(『エコーニヤ』六卷三、四号)七六頁—七八頁。四四年『手稿』によつて

は、向坂逸郎、『物神性』の発見』（『思想』一九五七年五月号）。

(10) 自然価格と市場価格の問題についての「評註」は、全集、第一部第三卷、四九四頁、五〇二頁等、純収入の観点への偏りについで「評註」は、同上、五一四頁—五一六頁等、過剰生産恐慌の否定についで「評註」は、同上、五一〇頁等にみいだされる。なお「リカード評註」についで、次のものを参照。

D. I. Rosenberg, *Die Entwicklung der ökonomischen Lehre von Marx und Engels in den vierziger Jahren des 19. Jahrhunderts*, SS. 91~106. 副島訳、八五頁—一〇〇頁。

M. Rubel, *Karl Marx, Essai de biographie intellectuelle*, Paris 1957, pp. 117~120.

(11) K. Marx, *Ökonomisch-philosophische Manuskripte* (1844), in *MEGA Abt. I, Bd. 3*, S. 93. 邦訳、ヤン・ヘン麗集補巻4、三三四頁。

なおある意味では、われわれは以上考察した「ミル評註」の中に、かかる構想の具体化の一端をみいだすことができるであらう。

(12) D. I. Rosenberg, *a. a. O.*, S. 124. 副島訳、一一八頁。

なおほぼ同一の批評の仕方が、一〇九頁（邦訳一〇三頁）にも散見している。

(13) M. Rubel, *a. a. O.*, p. 121.

む す び

この稿をむすぶにあたり、本稿で留保してきた一論点を明らかにしておきたい。すなわちここでは準備の不足から、ドイツ古典哲学とイギリス古典経済学とを媒介する若きマルクスにおける社会主義的立場の成立にあたって、初期社会主義思想の及ぼした影響について殆んど触れえなかつたことこれである。この点はこの稿では留保しておくとともに他日これを補正したい。